

## 「42件」の話

「42件」がやたら不人気である。

何が不人気かという、スラッシュドットジャパンなる半匿名メディアでの投稿記事、「なにが根拠?『日本発のオープンソースはわずか42件』」の件である。ここではLinux Worldというイベントで経済産業省の官僚の方が、資料をひきつつ「日本発のオープンソースはわずか42件しかない」と発言したことに対して批判(というのだろうか)が行われている。

また同時に八田氏による「日本発のオープンソースという幻想」という非難記事も別のWebページに掲載されている。これは経済産業省というよりも主に我々オモイカネに向けられたものだろう。八田氏はGNUのドキュメント翻訳等をおこなっている方である。

実は私自身はリストは作成したものの、具体的な数を覚えていたわけではなかったの、記事のことを聞いたときに「やたらリアルな数字だなあ」くらいに思っていた。そうしたらなんのことはなく、我々が作成したリストの話であったわけだ。

あのリストは正確には「資料：日本人によるオープンソースのリスト」と題しており、一応単独で読むこともできるが、基本的には我々がオープンソースを業務的に始められる方々に向けて説明をおこなう時のプレゼン補助資料である。

我々の業務にはパッケージソフトの製作もあり、それがすべてであるかのように誤解されることも多いが、ここ1年ほどは技術コンサルティングやオープンソース関連の受託開発を中心的におこなっており、各種のレベルのユーザー、ソフトウェアエンジニア、マネージャ、経営者の質問を受ける。その中でも案外初歩的に以下のような質問を受けるのである。

1. オープンソースは欧米圏のものではないのか
2. オープンソースには日本人も関与しているのか
3. 結局日本人が作ったものはどのくらいか

なぜこのような質問をされるかという、答えは簡単で、普通の人間であるならば「タダで使わせてもらうのだから、何かお礼をしなくては」と思うのが人情であって、そのためどこに「お礼」を返すべきなのかわからず悩むからである。「お礼」の先の窓口がどこか近場にあるのならば、そこに相談すればよいが、海外となるとよく分からなくなる。(我々のクライアントさんはいい方ばかりである)

我々の答えとしては、1. はまあ文化的に言えば欧米流だが、yesともnoとも言えない。2. はもちろんyes、3. はあげるには、いくらでもあげることはできるが、単に羅列したところで実際に使っていない方々に理解してもらうことは難しい。

そして「実感がわからないので具体的に」となるとなかなか答えるのが難しい質問となる。これはオープンソースに関わる人々でも多いだの少ないだのいろいろと意見が分かれていたところである。そして我々自身も本当のところ多いのか少ないのか長年疑問に思っていたため、よい定量化が必要であると考え、作成していたのである。

従ってこのリストは特段、経済産業研究所に依頼されて作成したわけではない。この辺りビジネスと呼ばれるほどの関係ではないので下衆な勘ぐりは御無用である。通常電子媒体でもデータを渡すことにしているし、研究所内ではWeb掲載も含めてご自由にして下さい、と伝えていたので経済産業研究所のWebに掲載していただいた次第である。

さて「42件」批判をしている方の多くは「資料：日本人によるオープンソースのリスト」をほとんど読んでいないのではないと思われる。また何も考えずに見ただけでは Windows 系やら、はたまた Vz エディタまで入っているのかは分からないと思われるので、ここで少し解説しておこうと思う。

リスト作成時にソフトウェアを取捨選択した基準については以下の通りである。(ですます調が変わる点にご容赦を。以降脚注も含めて原文のままである)

- (1) 「リーダーシップをとっている」  
 というのは、開発の方針の決定権を半分以上持っている (と推測される) ことを意味します。例えば FreeBSD はオープンソースとしては多くの日本人が貢献していると考えられていますが、それでも開発の責任者 (source commiter) のうち日本人の割合は 12% ですので日本人によるオープンソースとは考えられません。<sup>1</sup> ブートローダー GRUB も同様に日欧米の共同開発ソフトウェアですが、日本人のコア開発者が次期バージョンの基本実装を行うようですので、この場合は日本人がリーダーシップをとっているものと判断しました。
- (2) 「一定規模の」  
 というのは複数のファイルから構成され、ソースレベルで 5000 行以上のソフトウェアを指すこととしました。例えば簡単なスクリプトのようなソフトウェアや小さいフィルタプログラムはされません。
- (3) 「オープンソースソフトウェア」  
 というのはここでは、ソースを入手することができ、改変が可能なソフトウェアを指します。UNIX 環境用のオンライン配布ソフトウェアは通常ソースコード形態で配布され、典型的なライセンスのうちいずれかが添付されるため、オープンソースか否かは明解です。Windows のフリーソフトでは再配布条件が明示されていないことも多々あるため、ソースを公開している場合は広い意味でオープンソースであるとみなしました。  
 またソフトウェアとしてはプログラムだけに限定しフォントや文書のデータのソフトウェアは含めていません。
- (4) 「よく使われている」  
 については、配布物のダウンロード数や実際に使用されているかどうかを判断することは困難であるため、以下の基準を用いました。
  1. UNIX 環境のソフトウェア  
 日本で流通している多くの Linux ディストリビューションやフリー UNIX に収録されている場合や、複数回雑誌等に収録される場合によく使われているものと判断しました。
  2. Windows 環境のソフトウェア  
 ダウンロードサイト、インプレス社「窓の杜」に掲載されているオンラインソフトウェアをよく使われている基準としました。オンラインソフトウェアはオンラインで再配布可能なソフトウェアを指す用語で、シェアウェアとフリーウェアが含まれます。647 本のオンラインソフトを調査対象としました。

表題としてはオープンソースであるので、最初が OSI 流のオープンソース、次に範囲を広げて Windows のいわゆるフリーソフトウェア、さらに番外という順になっている。したがってもともと「数を数える」ことを目的とした資料ではなく発想を広げていただくための資料である。

<sup>1</sup>「The FreeBSD Developers」[http://www.freebsd.org/doc/en\\_US.ISO8859-1/articles/contributors/staff-committers.html](http://www.freebsd.org/doc/en_US.ISO8859-1/articles/contributors/staff-committers.html)によると 330 人がソースコミット権を持ち、うち 40 人が名前から日本人と推測されます。参考までに Linux では、240 人のメンテナがいて、うち 3 人 (1.2%) が日本人です。これは Linux カーネルのソースに含まれる中心的な開発者のリスト (Maintainer list) によるデータです。(2002 年 12 月 11 日現在)

批判される御仁はとくに (3) がお気に召さなかったようである。しかしながら OSI のオープンソースの定義を使ってしまうと 42 件どころか 30 件もないことになる。

(4) の条件は無視することもでき、その場合はもっと簡単に推測できる。SourceForge.jp の登録件数と本家 SourceForge のプロジェクト数を比較すればよいのである。本家側に日本人のプロジェクトが登録されている可能性を考慮せずに直接比較すると、558 件に対して 62305 件となる。(5 月 24 日現在)

通常 1000 ~ 2000 個のソフトウェアで構成される商用ディストリビューション中の 42 件 (2 ~ 4%) と、558/62305 (1%未満) では 42 件の方が数倍ましな割合といえよう。

このように我々はあえて少ない件数をとったわけではなく、あくまで実感が持てそうな定量化可能なラインを探した結果線引きしたにすぎない。

もし非常に理想的な統計を取るのであれば、プロファイラを用いて総コンピュータ利用時間中の価値加重をのせた、日本人によるコードの CPU 通過時間割合などが考えられるのかもしれないが、おおよそ実感が湧くものにはならないだろう。

他にも実感の持てるような、より正確な統計があるならばぜひ提示していただければ幸いである。現実的なものならアイデアレベルでも結構である。多くの場合は 1 ~ 5%前後の数字になるのではないだろうかと思う。

以下については単純に我々の調査力不足であるのでご容赦願いたい。

- Mac/PDA(PalmOS/Zaurus) を省略した点
- 窓の杜でなくベクターにしなかった点
- Apache を入れてしまった点<sup>2</sup>
- murasaki を欠いてしまった点 (改訂版に含めてある)

他にも誤りはあるかもしれないが、大きく上下することもないだろう。他に八田氏氏を中心として、頂戴したリストの具体的な批判に答えておこう。

> VFlib2 と VFlib3 はコードベースは全く別物なので分けなければおかしい。

「VFlib2/3」と記述してある。まったく別物とも思えないが、1 つとも 2 つともできるだろう。「そもそも『単品』で利用することの少ないソフトウェアを数えることに意味があるのかどうかも定かではない」などと主張する割にはこだわりすぎである。

> だいたい何で日本語化程度でイニシアチブを取っていることになるのか。

これは ASCII pTeX、dvipsk、xdvik を指していると思われるが、古典的なソフトウェアとして長年日本人の主導によってよくメンテナンスされているように私には見える。また削除しても数が増えるわけではない。

> なぜ w3m や SKK や T-Code のような (普及しているかはともかく) 真に革新的なソフトウェアが漏れているのか。

w3m はもともとリストに入っているというだけの話なので確認されればよからう。

SKK や T コードについてご存知ない方に説明をすると、これらは古き良き UNIX 時代に研究室内で製作されたソフトウェアで、SKK は文節を手動固定する入力方式、T コードは 2 ストロークでかな漢字一文字を直接指定する方式である。後者はそれゆえ「コード」という名前がついている。普通には「写植のような

<sup>2</sup>窓の杜サイトにあった 647 のソフトウェアを真面目に展開してすべて調べていた結果、Windows 版 Apache まで日本のものにしてしまった、という凡ミスである

もの」と説明した方が通りやすいのであって、私には T コードを「革新的」などと呼ぶ感覚の方がよほど革新的であった。独自の革新性を尺度とするならば、それこそ八田氏の言うところの「娯楽の殿堂」なる結果が得られよう。

他の方から頂戴したご指摘、Jakarta は検討したがものの、やはり多く収録されているわけではないと判断した。timitidy は確かに入れてもよさそうである。次版から追加させていただきたいと思う。他には具体的な指摘はなかったと思われる。

なぜ Windows のソフトウェアやら Vz が入っているかということ、すでにお気づきかと思うが、素のリストのままだと「それしかないのか」という話になるからである。

日本人はオープンソース的・市民社会的な自由というものがとても苦手と思えるが、さりとして公開開発・リソース集積といった文化がないわけではない。その古い例として MS-DOS 時代の Vz エディタを上げている。商用ソフトウェアでありながら、(アセンブリの) ソースコードが添付していたので、PC-9801 シリーズから FM-R シリーズ、旧 DynaBook へとユーザーのハックによって移植されて、今で言うところのオープンソースの性質を部分的に満たしていたのである。無論こちらは番外である。<sup>3</sup>

## 経済産業省とオープンソース

オープンソースが政策として語られる場合、ナショナルセキュリティをはじめとして複数の観点があり、省庁によっても異なるのであろうが、こと経済産業省について言うのであれば、やはり経済効果・産業競争力を重視することになるのだろう。

この場合、言うまでもなく、経済効果は無償のライセンスによって発生するのではない。ライセンス料を無償にしたところで、ソフトウェア生産にかかるコストが変化するわけではないので、社会全体の負担は同じであり、ソフトウェア生産が計画的になるか局所最適になるかが異なるのみである。

オープンソースによってもたらされる真の経済効果は、デジュールスタンダード (公的な標準) でも従来のなデファクトスタンダード (事実上の標準) でもない、新たな形態のポータビリティがもたらされることである。

そのような観点から「オープンソース」という言葉を使うときには、ネットワークに密着したソフトウェアの開発・流通・マーケティングの構造が重要なのであって、ライセンスのみを OSI の定義に照らして厳密に適用して議論することには意味がない。

それゆえ、オープンソースの性質を部分的にしか満たさないソフトウェア、Windows のものやら Vz やらについてもあえて触れるのである。またソフトウェア開発におけるリーダーシップを日本人が取っているか否かについては、産学問わず、国際的な日本のプレゼンスに関わる問題であり政策策定者が無視できるわけではない。

無論政策そのものについては私の仕事ではない。私の希望や意見もあれこれあるが、まだまだ力不足であり、お伝えできるのは精度を高めた情報提供までである。よりよい政策決定のための刺激剤として使っただけならば幸いと思っている。

<sup>3</sup> 独創的なソフトウェアは確かに楽しいものである。この資料を作成するのに協力してくれたスタッフ君は SKK ユーザーで、彼は親指シフトと組み合わせて使っている。T コードを使うためには少なくとも数百の漢字コードを記憶していなくてはならないため、本物の T コード使いには滅多にお目にかかれない。こちらは大学の同期の友人 T 君が一番記憶に残っている。こちらは学科の貧弱な計算機環境にたいする皮肉半分というところだったように記憶している。

## 「コミュニティ」

「42件」については、率直なところを話すと「42件が少なすぎる」などと驚く人がいたことに、私は逆に驚いていたのであるが、八田氏の記事と知って納得した。

彼の記事は簡単に言えば、

1. もともとの講演は聞いていない
2. ZDNet を始めとする伝聞を聞いた
3. 私の資料もよく読んでいない、TPO も考えていない
4. 「日本発」には意味がないと信じ込んでいる
5. 我々が日本の「コミュニティ」の貢献を無視していると考えている

と、なんとも妄想たくましいものである。私は資料中で「日本発」「日本人の貢献」「オリジン」らには一言も触れていない。「日本人がリーダーシップを持っているかどうか」という点について説明しているのみである。

我々は日頃オープンソースの作者には大変感謝しているし、名刺やら会社案内やら、先の資料やら、この文自体もオープンソースのソフトウェアで作成している。各ソフトウェアの作者の方々にはあらためてお礼を言いたい。

しかしながら「コミュニティ」とやらに過剰に反応されるのは本望ではない。ご存知の方は知っているであろうが、X-TT の件についても同様である。詳しくは日経 Linux 誌に記事にいただいたので、そちらを参照していただくとありがたいのであるが、要は、X-TT というプロジェクトがあり、これのメンテナを私が打診されたので引き継ぐと ML に流したのであるが、諸事情でメンテナンスができなくなり、放置しておいた（ここは私が全面的に悪い。いまでも X-TT 関係者には大変申し訳ないと思っている）ところ、丸3年の間一通のメールも受けることもなかったので、無事 XFree86 に吸収されたものと思っていたら、ここにきて突如一部から非難(?)された、という話である。

八田氏も抗議として記事を記述されるなら、事実関係を確認した上で、直接私につきつける、というのが一般的な対応であろうが、そのような責任を伴う言論はおこなえないのが「コミュニティ」とやらの特徴のようである。なんとも不自由なものだ。

ちなみに最初に引合にだした、クライアントさんから受ける質問、「お礼をする先はどこがよいか」については、無理しないで自分のところから出せるコードを公にするようにして下さい、というのが我々のいつもの回答である。普通の方々に無理なく普通のこととしてオープンソースにつき合っていただけることが我々の理想である。